

セキスイハイムM1：近代建築におけるその地位

セキスイハイムM1は、国際的な近代化運動が探索してきた工場生産戸建て住宅の典型的な例である。一連の「ボックス・ユニット」戸建て住宅—セキスイハイムM1—は1970年に日本で最初に出現したが、永年にわたって建築の夢であった「大量工場生産住宅」が初めて商業的に継続して成功を収めたケースである。この開発が日本でなされたことは重要であり、更に充分研究されるべき課題である。

モダニズムは、工場生産力を住宅に活用することに関して特に成功していない。その一つの注目すべき実績は、欧州において第二次世界大戦後に工場生産した大型コンクリートパネルを使用した同一の間取りを特徴とする集合住宅の生産である。しかしながら、いわゆる「工業化された」建築のこのストックは、近代化運動の大惨事の1つとして広く受け取られている。

M1が展開されていた頃、或いはその前に、日本、北米、欧州において、住宅の工場生産の夢を追った研究が他にも行われていた。その中で顕著なのは、黒川紀章、菊川清訓などのメタポリスト・グループの建築家達である。松下電器のような大きな日本企業も「ボックス・ユニット」を多家族住宅用途に実験を行った。欧州では、ヨナ・フリードマンやアーキグラム・グループが、工業生産された個別住宅による大型団地開発計画を展開した。モントリオールのSAFDE'S HABITATはこのような建築の唯一のもので、ユニークな建築で有名であり、また現在では工業化住宅とは正反対な建築であると理解されている。米国では、ラストロン・ハウス社が戸建て住宅市場で商業的に成功しなかった。1960年代の終りから1970年代の初めにかけて、米国政府の住宅研究開発機関であるオペレーション・ブレイクスルーは、多くの支持者の夢を実現できなかった。しかし、「ボックス・ユニット」の米国同等品であるHUD規格の「生産住宅」を始動させた。標準的な2x4構造を使用して、これが米国の戸建て着工総件数の20%近くを現在占めている。これらよりも前に、総合的な工場生産住宅の実現の理想に燃えて、グロピウス・ワックスマンの一般パネル住宅の実験が行われた。しかしながら、米国の誤って名前をつけた「生産住宅」を除いて、これらの実験は模型製作に終わるか、或いは数百棟以上の成功を収めた例は皆無である。

欧州における工業化の典型は、多数ユニットの建物を生産するために、一様性、コンクリートパネル、中央管理に重点をおいていた。日本においては、鉄鋼の需要に応じて朝鮮戦争の時期に開発された製造ノウハウによって、戸建て住宅の製造に使用するための軽量鉄骨枠を生産し、（電気製品や自動車に比べて）比較的少量生産で多様な部品を製造することが出来た。

セキスイハイム及びその建築家達—特に大野勝彦氏—は、日本の住宅購入者が個々のニーズに合わせて系統的に伝統的な住宅を買ってきたことを認識して、日本市場は一様性を受け入れないであろうと考えていた。欧州や米国における当時の建築家達とは異なって、セキスイの建築家達は、この消費者の要求に取り組むことにした。彼等は更に、日本の社会構造の基本的な変化と、その結果として起

きる熟練労働者の不足を察知して、工場生産を促進した。そして、彼等はモダニズムの設計原則に忠実で、M1は明らかに繋がれた関節(ユニット)、技術的な精度と平らな屋根で、デカルトの美しさを表現している。モダニズムに対する愛着の一面が、この「ボックス・ユニット」を使う決定に現れている。M1は伝統的な日本の住宅から明らかに隔絶したものであるが、欧米化に向かった全体的な流れの中で、強力な販売力によって、この国際的なスタイルの住宅の大きな市場を創出した。

革命的開発として現在認知できるM1タイプは、個々のユーザーの設計に関わる役割を尊重し、活用するべくデザインされた。建築家が主要な役割を演じた他の建物システムの開発とは異なり、M1の開発は、工業生産を実現しながら、同時にユーザーコントロールを受け入れ、中央コントロールの観念を捨てた。

その結果、現在は珍しい「ボックス・ユニット」住宅の形をとりながら、技術的に複雑な部品のキットを製作し、同様に複雑な製造工程、マーケティング、及びサービスと結びつけて、日本で成功を収めたが、世界中の他の地域ではこれを定着させることが出来ていない。

今日、これは「マス・カスタマイゼーション」と呼ばれているが、セキスイハイムM1は、日本社会における他の変化に伴って定着させることができた先駆的な開発であった。個別の消費者と大企業の関係構築が、M1とその一連の住宅の成功物語の一部であるが、日本以外では模倣することが出来ない話かもしれない。

工場生産の「ボックス・ユニット」の次の展開ステップは、パイプ、電線、ダクト及び設備をボックスの中に設置してボックスを住むに適させるサブシステムから、更にボックス自身の「もつれをほどく」ことであろう。

サブシステムの「ライフサイクル」の特質は、センチュリーハウジングシステムにおいて日本で最初に創始され、現在はSI住宅によって更に開発されているが、これがM1のアプローチの基本的な前提に対して、更に価値を加えることになるかもしれない。次世代のM1がSIの特質を採用して、日本で定着しようとしている「ストック維持管理」哲学の軌道にM1を乗せるかもしれない。

終わりに、セキスイハイムM1 や日本の工場生産戸建て住宅或いはSI住宅について英語で書かれたものが驚くほど少ない。この不幸な状況が、近代化運動の時代に、日本での開発から教訓を得るための努力や、日本での開発を他の住宅と比較することを更に困難にしている。

2005年1月

ステファン・ケンドール、博士

建築学教授

建築学部

建設未来研究所・理事

建築・計画大学

ボール州立大学

インディアナ州、マンシー市 47306

共同コーディネーター、 CIB W104 Open Building Implementation

経歴

ステファン・ケンドール博士

建設未来研究所理事

ボール州立大学建築学教授

ステファン・ケンドールは、1999年、建設未来研究所(www.bsu.edu/bfi)の理事として、また建築学部門の学部メンバーとして、ボール州立大学に加わる。同氏は、建築学の専門資格をシンシナティ大学から、建築学及び都市設計の修士号をセントルイスのワシントン大学から、また、建築学における設計理論及び方法について博士号をマサチューセッツ工科大学から得る。学界に入る前は、ケンドール博士は建築家として専門実務に従事。

30を超える論説、論文を発表し、米国内外で講義をし、「住宅のオープンビルディング」(Spon 出版 1999年)の共著者である。オープンビルディングの研究と推進に焦点を当てた国際委員会(CIB W104)の共同コーディネーターである。こうしたオープンビルディングの研究

者は、建築環境を常時変化する人工の産物と見なし、それがもたらす技術的、組織の複雑性を管理するための理論及び方法の開発を提言している。研究のテーマには、適応可能な建物の支えとなる分担設計、消費者の選択、もつれの無いシステム、サプライチェーン物流、建設プロセスなどを含む。

ケンドール博士は、設計教育者であり学者である。設計方法におけるその研究は、「思慮深い実務家」の質的な洞察と、建築環境に焦点を当てる科学をベースにした研究慣例が持つより経験的な所見の間にある、しばしば指摘されるような隔たりに対して、橋渡しをしようとするものである。博士は、高水準の「攪拌」と消費者に敏感な需要によって特徴付けられるような、適応性のあるユーザー志向の建物を設計し建設する為の方法を研究する。最近この活動は拡大してきており、住居建物と医療施設の設計及び建設の両者に、オープンビディングの原則を適用させることが含まれてきている。